



農産物直売所スタンプラリー が始まりました

直売所へのリピーターを増やし、地域活性化を推進することを目的とした「農産物直売所スタンプラリー」が実施されています。

スタンプ台紙は、9月17日（金）に新聞折込広告で配布された「いわきブランド農産物通信」の4ページとなっています。

スタンプラリーの参加加盟店は40箇所。5つ以上のスタンプで、ジャムやドレッシング、フルーツや野菜の詰め合わせなど、いわきの旬がたくさんつまった、美味しい景品が抽選で当たります！



皆さんもぜひ参加してみたいかがですか？

●実施期間

平成22年9月17日（金）～
平成23年2月28日（月）まで
※当日消印有効

●台紙設置場所

市内各直売所、総合図書館、農業振興課（いわき市役所4F）、支所、公民館

●参加資格

1人1応募のみで、1店舗あたり1スタンプとします。

●スタンプ台紙の持参送付先

（問い合わせ先）
〒970-8686
いわき市平字梅本21番地
いわき市役所4F農業振興課
TEL22-7479



地域で育てる！活気ある農業への道

ここ渡辺地区は、古くから稲作が盛んな地域です。

特に、渡辺小学校の田んぼは、稲作が始まった弥生時代に開田された由緒あるところと云われています。小学校のほど近くにある『岸遺跡』の出土物からも、その稲作の歴史が推定できるそうです。

気の遠くなる昔から営まれてきた農業にも、様々な変化が見られるようになりました。米離れや米あまり問題、食糧自給率の低下などが国の問題として認識されるようになり、農業への活気が次第に失われつつあるように感じます。しかし、そのような中で、地産地消を推進し、地域に根付いた農業を目指して活動している団体があるのです。

中部地区の一つに、泉ヶ丘ハイタウンと呼ばれる住宅街がありますが、近くに路線バスやスーパーが無く、一部の住民は不便を感じている状況です。特に、車を所有しない高齢者にとっては、満足に買い物がない



▲『あざみの会』による野菜市
多くの住民から喜ばれており、開始数十分で売り切れになることもある。

きないため、食材を買うのにもタクシーを使うことがあると聞きます。

そのような中、農家グループ『あざみの会』では、泉ヶ丘地区の町内会と話し合いをし、週一回土曜日に、泉ヶ丘自治会館の駐車場で野菜市を開くようになりました。朝採れの土の付いた野菜は、スーパーでも買えないほど新鮮で、短時間で売り切れてしまうそうです。そのほかにも、手作りのお惣菜や生花などがズラリと並び、会場は

地区住民の活気で溢れていました。

また、NPO法人シニア人財倶楽部の活動にも目を見張るものがあります。毎週火曜日に、泉ヶ丘地区の各所を、新鮮な野菜や肉、魚などを乗せた移動販売車で巡回しています。そのほかにも、都会からの新規就農希望者と協力し、山間地の耕作放棄地を借り受けるなど、農業への参入に日々励んでいるのです。『援農事業』の一翼を担う存在として、大いに期待できることでしょう。

農産物等の販売を通して地域貢献に取り組むとともに、農業を身近なものにしようと頑張る双方の姿には、心意気を感じました。私達農業者が直面している課題はたくさんあります。今後は、食糧自給率向上はもちろんのこと、農業をより活発なものにするための、一層の努力が必要です。

『援農』へ立ち上がる協力者の存在を心強く思う一方で、農業者としての更なる向上心を持ち続けていきたいと思えます。

編集後記

農業委員会だよりも、今号で150号の発行を迎えました。多くの農業委員の皆様、そして事務局のお力添えでここまで来れたことに、感謝を申し上げます。本誌第1号は昭和48年7月1日に発行され、その当時農業者の代表としてご尽力されたのが、初代会長の山部隆雄様でした。初刊から37年間、多くの苦勞を乗り越え、昨年には第16回農業委員会だより「全国コンクールで優秀賞受賞」という栄誉をいただくことができました。これもひとえに皆様各位のご支援の賜物ではないかと思っております。

さて、直近の日本農業の状況はと言いますと、ご存知のとおり、食の安全保障の確立に向かって全国民が取り組んでいかねばならないことが、第一のテーマとなっています。今年の夏は、30年に一度の異常気象とも言われており、農業経営にとっては大きな不安要素となっております。

また、国民の米の消費量も減少しており、米離れは国の深刻な問題として挙げられています。

その一方で、米の新品種栽培や、米から炭酸飲料水を作ることに成功したという明るいニュースも耳にしております。今後も「米あまり」の解消に向けた、新たな取組みに期待したいものです。

編集委員

三戸 進 渡邊 一雄
遠藤 靖 鯨岡 千春 草野城太郎

(執筆 遠藤 靖委員)